国際日本研究センター NEWS LETTER ニューズレター

International Center for Japanese Studies

No.02
2010.06

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

世界の日本語・日本学—教育・研究の現状と課題—国際シンポジウム開催　Globalizing Japanese Studies: Current Issues in Education and Research International Symposium …… P1 ～ 2
国際シンポジウム総括、国際シンポジウムをふりかえって　Reflecting on the International Symposium …… P2
部門別活動紹介　Divisional Activity Reports …… P3 ～ 4
「生活者としての外国人」の日本語能力測定・評価に関する調査研究（文化庁委託事業）　Research Report on Measuring and Evaluating the Japanese Skills of "Foreigners Living in Japan" …… P4
長春便り①　News from Changchun …… P5
ウクライナから見た日本　Japan as seen Ukraine …… P6
ウィーン大学東アジア研究所（交流協定校紹介）・活動報告　The Department of East Asian Studies at the University of Vienna・Activity Reports …… P7
ジャーナル『国際日本研究』のお知らせ・研究会のお知らせ　"International Japanese Studies" Journal・The Study Meeting …… P8

世界の日本語・日本学 ～教育・研究の現状と課題～

Globalizing Japanese Studies: ~ Current Issues in Education and Research~

国際シンポジウム開催

2010年3月6日と7日の2日間にわたり、本センター主催による第1回国際シンポジウム「世界の日本語・日本学～教育・研究の現状と課題～」が、本学本部管理棟大会議室にて開催されました。15ヶ国・地域の各大学において、第一線で活躍されている20名の講師と、国内から3名のコメンテーターをお招きし、日本学、日本語学、日本語教育に関する教育、研究の現状や課題、さらに、本学及び国際日本研究センターに対する要望などについて、フロアも含めて活発な議論が交わされました。2日間を通して、延べ200人以上の来場者があり、盛会のうちに終了しました。

International Symposium

On March 6 and 7, 2010, our 1st International Symposium, "Globalizing Japanese Studies: Current Issues in Education and Research" was held at the Large Conference Room at the Administration Office Building of our university. With 20 speakers from 15 countries/regions and 3 Japanese commentators we have invited, there were vibrant discussions on topics including Japan studies, Japanese language studies, Japanese language education, current status and issues of research, and requests for our university as well as for the International Center for Japanese Studies. We had over 200 participants during the two-day period, and the symposium successfully came to a close with fruitful discussion sessions.

プログラム

3月6日（土）

挨　拶　亀山　郁夫（東京外国語大学学長）
宮崎　恒二（東京外国語大学理事）
野本　京子（国際日本研究センター　センター長）

基調講演

「英国および欧州における日本学教育の変化」アンドリュー・ガーストル（ロンドン大学）
「スタンダーズの到達目標からみる中国の日本語教育」趙　華敏（北京大学）

セッション1 日本語学

司　会　早津　恵美子（東京外国語大学）
コメンテーター　蒲谷　宏（早稲田大学）

「韓国における日本語教育と日本研究」韓　美卿（韓国外国語大学）
「英国の高等教育（並びにロンドン大学東洋・アフリカ研究学院）における日本語研究と日本語教育」バルバラ・ピッツィコーニ（ロンドン大学）
「モスクワ大学における日本語教育」ステラ・ブイコヴァ（モスクワ大学）
「インドネシア大学の日本研究と教育」シェディ・チャンドラ（インドネシア大学）

セッション2　文学

司　会　村尾　誠一（東京外国語大学）
コメンテーター　柴田　勝二（東京外国語大学）

「リーズ大学における日本学」マーク・ウィリアムズ（リーズ大学）
「"サピエンツァ"ローマ大学における日本語教育及び日本研究」
マティルデ・マストランジェロ（"サピエンツァ"ローマ大学）
「北京日本学研究センターと中国の日本学研究」張　龍妹（北京外国語大学）

3月7日（日）

セッション3　日本語教育

司　会　横田　淳子（東京外国語大学）
コメンテーター　阿部　祐子（国際教養大学）

「シンガポールにおける日本語教育～認知的アプローチによる教育の意義と可能性～」ウォーカー・泉（シンガポール国立大学）
「継承言語から外国語としての日本語教育へ」キタハラ高野 聡美（リオ・デ・ジャネイロ州立大学）
「エジプトにおける日本語教育の現状」エルカウィーシュ・ハナーン（カイロ大学）
「ウクライナにおける日本語教育事情」オリガ・ゴルノフスカ（キエフ国立言語大学）
「ベトナムにおける日本語教育・研究の現状と課題」グエン・ティ・ビック・ハー（ハノイ貿易大学）

セッション4　文化

司　会　谷　和明（東京外国語大学）
コメンテーター　友常　勉（東京外国語大学）

「オーストリアにおける日本学」ローランド・ドメーニグ（ウィーン大学）
「シンガポールにおける日本研究～その発展と課題～」レンレン・タン（シンガポール国立大学）
「グローバル化と地域化の進む世界におけるアメリカの日本学研究」
ヴィクター・コシュマン（コーネル大学）

セッション5　歴史

司　会　林　佳世子（東京外国語大学）
コメンテーター　櫻井　良樹（麗澤大学）

「日本研究～インドからの視点～」　ブリッジ・タンカ（デリー大学）
「日本学研究から見る日台の学術交流の発展」　徐　興慶（台湾大学）
「ナポリ東洋大学～250年あまりの伝統と将来の展望～」シルヴァーナ・デマイオ（ナポリ東洋大学）

総括討論

司会　中野　敏男（東京外国語大学）坂本　惠（東京外国語大学）

シンポジウム総括

本シンポジウムでは、世界中の大学において、人文科学や古典研究が軽視され、実用主義的なスキルの習得が強まる傾向にあり（ガーストル氏：ロンドン大学）、高等教育機関への予算の見直しおよび大学に対する評価が、研究や教育に影響を及ぼしているという共通性があることが明らかになりました。

分野別に見ると、日本語学では、生態的なコミュニケーションへの興味の高まりによる応用日本語学の発展、そして日本語教育では、協働的学習、自律学習への志向、インターネット・リソースの活用へ向けての環境作りなどが強調されたように思います。また、日本とアジアといった地域研究としての学際的日本研究の重要性は当然としても、そうした地域研究そのものへの批判的視点も必要であることが指摘されました。なお、地域に即した問題としては、ＥＵにおけるボローニャ・プロセスによる大学改革や言語教育への影響、ブラジルにおける継承言語としての日本語教育の在り方など様々な課題も挙げられました。

また、ポップ・カルチャーの影響により日本や日本語に対して興味を持った日本語学習者が多く見られることは、今さら特筆すべき点ではありませんが、彼らの日本への興味を、理解へつなげ、ひいては、日本や日本語について自力で探求できるようにするためには、日本研究に関する科目間、専門の異なる教員同士の連携、より効果的な留学プログラムの検討が必要であると思われます。

すなわち、本シンポジウムにおける日本を含む16カ国・地域による討論は、

①（人文科学や前近代の研究も含めた）日本学、日本語学並びに日本語教育学のインターディシプリン

②　日本学、日本語学、並びに日本語教育学に関する情報の世界的なネットワークの構築

③　日本留学（短期・長期プログラム、大学院レベルを含めて）に際しての送り出しと受け入れ双方の連携

といった学問、情報、留学生戦略、それぞれの異なるレベルでの連携の重要性を再認識したことに集約されます。

本シンポジウムにおいて、世界の日本学、日本語と日本語教育に関する教育と研究を機械的に並べるのではなく、それらを有機的につなぐことの重要性が痛感されました。このシンポジウムは、今後各々の連携にむけて本センターが発信してゆく際の出発点となったと言えましょう。

（谷口龍子記）

【趙華敏氏（左）とアンドリュー・ガーストル氏】

The Symposium clarified the fact that there was a tendency toward acquiring practical skills with a lesser focus on the humanities and the classics (Professor Gerstle, University of London,) and that the budget reviews and evaluations of higher education institutions have impacted their researches and education.

Some topics were especially emphasized in the symposium. For example, in the field of Japanese language studies was the development of the practical Japanese studies reflecting an increasing interest in active communication, and in the field of Japanese language education were the tendencies toward cooperative and independent studies and the provision of an environment for utilizing Internet resource.In addition, it was pointed out that even while it was important to regard interdisciplinary Japanese studies as a part of regional studies on Japan and Asia, there is also a need for critical perspectives toward this kind of regional studies. Some of the other issues in different regions include the impact on language education and university reforms in EU through the Bologna Process, and the ideal Japanese language education as a heritage language in Brazil.

Needless to say, Japanese pop culture has drawn interests of many people who subsequently became Japanese learners. In order to extend their interests toward understanding of Japan, and further on to independently explore Japan and Japanese language, we believe that a network between Japanese research subjects and professors, as well as more effective study-abroad programs are necessary.

To summarize, through the discussions held at the Symposium between 16 countries/regions including Japan, we were able to recognize the importance of the studies, information, strategies for foreign students, and the network between different levels on the following agenda.

1.Establishing inter-discipline of the Japan studies, Japanese language studies, and Japanese language education (including humanities and pre-modern researches)

2.Structuring a global network for exchanging information on Japan studies, Japanese language studies, and Japanese language education

3.Coordinating the study-abroad programs in Japan (short/long-term programs including post-graduate levels) between the sending and receiving parties for

We felt the importance of organically connecting researches with education regarding Japan studies, Japanese language studies, and Japanese language education of the world, rather than mechanically lining them up. We believe that the Symposium became the starting point for our center to provide resources for further collaboration with different sources.

(Ryuko Taniguchi)

国際シンポジウムをふりかえって

国際日本研究センター長　　野本　京子

国際シンポジウム「世界の日本語・日本学―教育・研究の現状と課題―」開催から、はや3ヵ月経ってしまいました。世界各地から遠路はるばるお出でいただいた20人に及ぶ報告者のみなさま、コメンテーターをお引き受けいただいたみなさま、そして、ご来場いただきました多くのみなさまに、あらためてお礼を申しあげます。本当にご協力いただき、ありがとうございました。

シンポジウムでは、ご専門をお持ちの先生方に非常に短い時間のなかにご報告をおさめていただくという無理なお願いをしてしまい、心から申し訳なく思っております。また、最後のディスカッションの際も、フロアからのご意見を含めて、十分な時間がとれなかったことをお詫びいたします。

とはいえ、今回のシンポジウムは最初の一歩と考えております。せっかくご縁が出来ました先生方そしてご来場いただいたみなさまと、今後、じっくりお付き合いさせていただきたいと思っています。インターネットによって多くの情報が入手できるようになった現在ですが、シンポジウムを通じてつよく感じたのは、人と人との直接的コミュニケーションの重要性でした。今後は、規模は小さくても、ご専門をじっくりうかがう場を作っていきたいと思っております。そして、一方的ではない双方向のネットワークを目指して、本センターならではという活動を模索していきたいと念じています。今後とも、どうぞよろしくお願い申しあげます。

Reflecting on the International Symposium

– Director of the International Center for Japanese Studies, NOMOTO Kyoko

Two months have passed since we held the International Symposium. I would like to thank the participants, commentators, and the 20 speakers who came all the way from many parts of the world for all your contribution and support.

I truly regret that we had to put all the speakers who all have their own areas of expertise on such a tight schedule at the symposium, and that we could not spare more time for discussions, questions, and answers.

Nevertheless, we believe the symposium was a great opportunity for us to mark the first step. We hope to maintain a good relationship with all the professors and participants for years to come. Despite the fact that the technology has enabled us to retrieve information almost instantly using the Internet, through this symposium I was able to reaffirm the importance of face-to-face interactions and communications between people. For our future events, though the scale may be small, we hope to provide a place where we can have more in-depth discussions on a variety of expertise. Finally, we will strive to establish an interactive network that is not merely one-way, and seek for activities unique to our center. We will greatly appreciate your continuous support.

国際日本語教育部門 International Japanese Education Division

4月5日に、ブリンガム・ヤング大学のロバート・ラッセル氏による「アメリカにおける日本語教育―英語母語話者に対する効果的な日本語教授法―」という題目のワークショップが開催されました。当該大学は、宣教師が多く、アメリカにおいて中上級レベルの日本語学習者を最も多く抱えており、日本人にとっての生活の意義を理解し尊重することに日本語の学習が位置づけられ、効果的な会話のスキルを身につけるために、OPI（Oral Proficiency Interview）を活用した試験などが実施されていました。当日は、フロアのスペシャリスト達と具体的な質疑応答が交わされました。

9月にはカイロ大学のハナーン氏による講演会が予定されています。

国内外の高等教育機関における日本語教育の調査研究では、3月に行われた国際シンポジウムの講演者の協力により、16カ国・地域における18大学の調査報告を得ることができました。同月には北京大学、北京外国語大学(中国、望月圭子)、フランス国立東洋言語文化学院、ディデロ第7大学、スタンダール第3大学（フランス、谷口龍子)、5月には、ハーバード大学（アメリカ、望月圭子）での調査が行われました。

また、昨年に引き続く「日本語学習者の母語・地域性を踏まえた日本語教育研究―国内外の日本語教育機関との協働的研究―」プロジェクトとして、英国SOASとの協働研究「日本留学中の学習者の日本語習得に関する共同研究」（詳細については協議中）（海野多枝）と「フランス人日本語学習者を対象とする教材開発に向けての基礎的研究」（小林幸江、鈴木美加、谷口龍子)を行う予定です。（谷口龍子記）

【ロバート・ラッセル氏】

On April 5th, the Workshop titled, “Japanese Language Education in the U.S. – Teaching Japanese as a Foreign Language to Native Speakers of English,” was held by Professor Robert Russell of Bringham Young University. There are many missionaries at the aforementioned university, with many students learning Japanese in the intermediate to advanced levels. In order for the students to be able to understand and respect the meaning of life for Japanese people, and also to acquire effective conversational skills, the university has adopted exams using the Oral Proficiency Interview（OPI）. The workshop also provided an opportunity for questions and answers between the participating specialists at the workshop.

In September, we are expecting a speech by Professor Hanan of Cairo University.

As a part of our project from last year, “Japanese Language Education in the Light of Learners’ Mother Tongue and Regionality – Cooperative Studies Between Domestic and International Japanese Education Organizations,” we will be starting “The Fundamental Study for Educational Materials Designed for French People Learning Japanese”（Yukie Kobayashi, Mika Suzuki, Ryuko Taniguchi） and a joint project with SOAS, “Cooperative Studies on Japanese Language Acquisition of Learners Studying in Japan”（details are still being discussed, Tae Umino）.

For our research on Japanese education in higher education institutions, we were able to successfully collect research results from 18 universities in 15 countries/regions thanks to the support by participating presenters of the International Symposium held in March. Also in March, researches were conducted at Peking University, Beijing Foreign Studies University（Keiko Mochizuki, China,）France National Institute of Oriental Languages and Civilizations, Paris Diderot University, Stendhal University, Grenoble 3（Ryuko Taniguchi, France,）and in May at Harvard University（Keiko Mochizuki, U.S.A.）

（Ryuko Taniguchi）

対照日本語部門 Contrastive Japanese Division

日本語との対照言語学研究　文献情報データベース構築

日本語との対照言語学的研究はさまざまな外国語でこれまで行われてきていると考えられます。言語ごとにこれまでの蓄積の差はあるものの、文献情報は各研究分野に限定されているのではないでしょうか。この機会に、日本語と諸言語との対照言語学研究文献データベースを構築し、検索・閲覧・追加などが一元的に行えるようにしたいと思います。

このような目標をたて、まず、日本語とスペイン語の対照研究文献収集を試行します。国内外の紀要、学会誌、単行本、その他に掲載された、言語学的研究のみならず、語彙研究、表現研究、比較文化論なども含め入手可能な文献の情報をできるだけ網羅的に収集し、データベースをデザインします。今後、中国語をはじめ、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、タイ語など作業態勢が整った言語について対象を拡張していきます。本センターが日本における対照言語学研究文献情報データベースの拠点になることを期するものです。（早津恵美子記）

Japanese Contrastive Linguistics Research – Building the Document Information Database

The study of contrastive linguistics is known to have been conducted between Japanese and a number of other languages. Although the amount of accumulated information varies across different languages, document information is most likely limited to only certain research fields. We would like to take this opportunity to construct a database that will allow us to integrate searches, browsing, and modifications in dealing with information regarding contrastive linguistics research between Japanese and other languages.

With this goal in mind, we will start our trial study by gathering document information for Japanese and Spanish. We will design the database utilizing a wide variety of information ranging from domestic and international bulletins, scholarly journals, books, and articles on topics of linguistics as well as lexicological, phenotypic, and cross-cultural studies. It will be expanded to other languages such as Chinese, English, German, French, Russian, and Thai once the conditions are in place to carry out work in those languages. Through this approach, we hope to become the central document information database for the research of contrastive linguistics in Japan.（Emiko Hayatsu）

社会言語部門 Sociolinguistics Division

この部門では「日本語」という括りを改めて問い直す視点から日本語の多様性を追求していきます。そのように考えると日本語の中には単に地域方言としてのバラエティだけでなく社会方言、「日本」の外に出た日本語、外国人の話す日本語などが視野に入ることになります。これら多様な日本語とそれを支える社会の研究を行っていきたいと考えています。そのためには、文献の収集、整理、国内外のフィールドでのフィールドワーク、他機関との連携なども視野に入れ、方法論を考えることから始めていきたいと思っています。文献・資料の整理はこの部門の重要な課題の一つだと考えています。というのは社会言語(学)はその対象とする領域の幅が広く、たとえば本学でも様々なアプローチから授業が行われています。初学者も含む学生の皆さんには、全体像はわかりにくいかもしれません。関連図書・論文のデータベースの作成の作業、まずは日本語の文献をその対象としますが、将来的なさらなる拡がりに対応できるだけの質と量、検索などでの使い勝手の良さも考えたものにしたいと考えています。

さらにセンター主催の事業として、日本語の社会言語学の権威で現奈良大学教授で元大阪大学大学院教授、真田信治氏の講演会を秋頃に予定しています。ご期待ください。

（前田達朗記）

【４月に着任しました
前田達朗（専任講師）です。】

We would like to explore the multiplicity of the Japanese language by reexamining the field of “Japanese language.” Our focus includes not only a variety of regional dialects but also social dialects, Japanese language that has gone beyond the boundaries of “Japan,” and Japanese spoken by foreigners. One of the important processes of sociolinguistics is on-site fieldwork. Starting this year, we are planning to go to different places in and outside of Japan to study about the Japanese language as well as the societies that supports it.

Our university has taken various approaches to teach the subject of sociolinguistics. However, the field is so broad that it is often very difficult for students, especially beginners, to be able to grasp its overview. For that reason, we consider the organization of literature and materials as one of the most important issues, and are set to start on production of a database for relevant literatures and articles. We will start off by including literatures that is written in Japanese, and in the future, will make improvements so that the quality and quantity of data is able to meet ever-expanding needs, and is easy to search.

We are aware of the great amount of workload required for realizing this project, and would appreciate your support including your opinions and information from various fields.

Finally, we are also excited to announce that we have scheduled a lecture by Professor Shinji Sanada of Nara University this coming fall. He is a former professor at the Graduate School of Osaka University and is also a leading sociologist in Japan.（Tatsuro Maeda）

比較日本文化部門＋国際連携推進部門 部門合同報告

Divisions of Comparative Japanese Culture and International Cooperation – Joint Report

比較日本文化・国際連携推進部門では、合同でつぎの取り組みをすすめてきた。

2010年5月20日はブリッジ・タンカ教授（デリー大学東アジア学部）による講演「明治維新と宗教：北畠道龍の生涯を通して」を開催した。15名ほどの参加であったが、海外の日本研究の視点、海外の他の歴史研究の視点もまじえて活発な議論が交わされた。タンカ教授は2010年3月に本センターがおこなった国際シンポジウム「世界の日本語・日本学」のゲストスピーカーでもあり、そこで培ったネットワークを生かした企画であった。

また、国際連携推進部門を中心に、「日本語で学ぶ日本」講義シリーズの映像コンテンツの作成と配信の準備がすすめられてきた。これは、海外の日本語・日本研究の初学者を対象として、平易な日本語で「日本を学ぶ」講義の映像コンテンツを作成・配信する、発信型の教育モデルの構築として位置づけられる取り組みである。すでに「日本の伝統芸能」（有澤知乃・前・本センター特定専門員）、「育児、女性、少子化と現代社会」（友常勉・本センター講師）は収録ずみであるが、今後、継続してほかの先生方の協力をお願いしていく予定である。なお、有澤氏による「日本の伝統芸能」（全3回）はすでに HP にアップされている（http://www.tufs.ac.jp/common/fs-pg/portal/sien/opdi/kyouzai.html）。

さらに、今後の方針として、3月の国際シンポジウムでの交流の中で生まれた企画（比較日本文化研究プロジェクト）である、“「牡丹灯籠」の旅――中国、日本、ベトナム”（仮）、また、複数年度にわたる研究プロジェクトとして、“日系移民の世界的広がり、その複眼的研究”（仮）などが提起されている。その経過についてはその都度アナウンスしていきたい。 （友常勉記）

【ブリッジ・タンカ氏（中央）】

The divisions of Comparative Japanese Culture and International Cooperation have jointly undertaken the following efforts.

On May 20, 2010, we held a lecture by Professor Brij Tankha (University of Delhi, East Asian Studies) who spoke on the topic of “Meiji Restoration and Religion: Life of Doryu Kitabatake.” The 15 participants who attended the speech actively discussed the perspectives on Japanese researches and on other historical researches abroad. Professor Tankha was also one of the presenters at the International Symposium, “Globalizing Japanese Studies,” held in March, and it was from there that we were able to foster our connections to bring about Professor Tankha’s speech in May.

The International Cooperation division has taken the lead to prepare the video production and distribution of a series of lectures entitled, “Learning About Japan in Japanese.”Through the production and distribution of videos, this approach is formulated as a transmitting model of education targeting Japanese language learners and researchers abroad who wish to “learn about Japan” in simple Japanese. Some of the lectures, such as “Japanese Traditional Arts” (Shino Arisawa, former Special Researcher,) “Childcare, Women, Declining Birthrate, and the Modern Society” (Tsutomu Tomotsune, ICJS Lecturer,) have already been taped, and we will continue to ask for support from other professors in the future. Ms. Arisawa’s lectures, “Japanese Traditional Arts,” (3 Episodes) have already been uploaded on the following website. (http://www.tufs.ac.jp/common/fspg/portal/sien/opdi/kyouzai.html.)

Through the International Symposium in March, new projects have been proposed as a part of our Comparative Japanese Cultural Study. They include “Travel of Botan Doro – China, Japan, and Vietnam,” (tentative title) and a multi-year project, “Global Expansion of Japanese Immigrants based on Multi-Perspective Studies” (tentative title.) We will keep you posted as we make progress on these new projects. (Tsutomu Tomotsune)

4月から澤井雅子（特定専門員）がセンターの常勤として、研究業務やプロジェクトのコーディネートを行っています。

Masako Sawai works as a Special Researcher, engaging in research and coordinating various projects at the Center from April.

「生活者としての外国人」の日本語能力測定・評価に関する調査研究

平成21年度 文化庁 日本語教育研究委託事業

Japanese Language Education Consignment Project of 2009 by the Agency for Cultural Affairs

Research Report on Measuring and Evaluating the Japanese Skills of “Foreigners Living in Japan”

日本社会で生活する外国人にとって必要な日本語コミュニケーションの能力を評価する新しい種類の日本語テストに向けて調査研究を行いました。

作業の内容は次の二つに分かれます。

①独立行政法人国立国語研究所の平成21年度上半期までのデータベース構築の延長として，外国語の会話力を客観的に測る OPI（Oral Proficiency Interview）を使い，外国人の日本語会話データの収集と文字化，諸情報の付加，評価の観点からの分析を行いました。

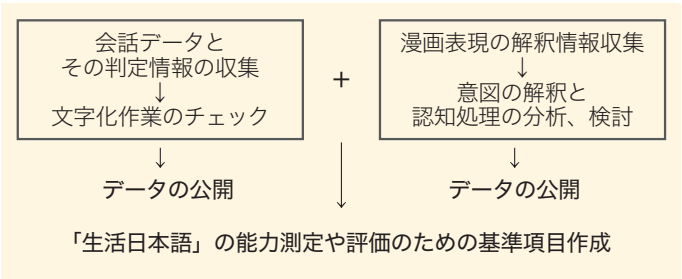
②漫画表現を抽出し，日本人の意図の解釈の範囲と認知処理の観点からの分析，検討を行いました。

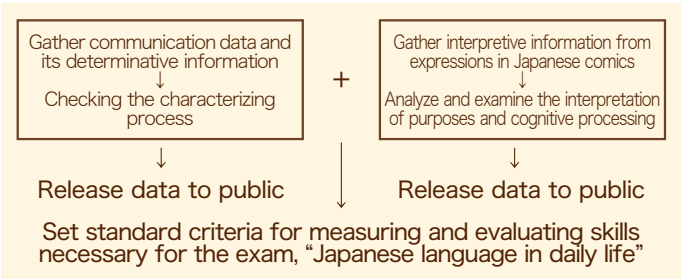
In preparation of the introduction of a new type of Japanese language exams testing the communication skills necessary for foreigners living in the Japanese society, we have conducted a research to develop a criteria of measuring daily communication skills.

The following are the research activities.

As an extension of the National Institute for Japanese Language’s approach to build up a database in 2009, we have conducted an analysis of the information on foreigners’ Japanese communications by gathering, characterizing, appending, and evaluating the data using the OPI (Oral Proficiency Interview.

By extracting the expressions used in Japanese comics, we have analyzed and examined the information in perspectives of cognitive processing and the scope of interpretation in Japanese native speakers.





総括スタッフ：野本京子、坂本惠、谷口龍子（以上は本センター教員）、伊東祐郎（本センター連携研究員）、柳澤好昭（本センター特任研究員・明海大学教授）、小柳昇（本学博士後期課程）

主要調査スタッフ：柳澤好昭、小柳昇

Coordinating Staff : Kyoko Nomoto (ICJS) , Megumi Sakamoto (ICJS) ,Ryuko Taniguchi (ICJS) , Sukero Ito (ICJS) , Yoshiaki Yanagisawa (Special researcher at ICJS and professor at Meikai University) , Noboru Oyanagi (Doctoral student at Tokyo University of Foreign Studies)

Main Research Staff : Yoshiaki Yanagisawa Noboru Oyanagi

長春便り①　News from Changchun （Megumi Sakamoto）

この３月より、中国、吉林省東北師範大学で日本留学予定の学生に対し日本語教育を行っている坂本惠先生による現地からのお便りです。

This report is by Megumi Sakamoto, who has been teaching Japanese since March at the Northeast Normal University in Jilin Province to prospective students who are coming to Japan to study.

【赴日本国留学生予備学校】

中国は今、5月から上海で開かれている「世界博覧会」（略して「世博」）で沸き立っています。経済が成長している国らしく、町に人も物もあふれ、活気を感じます。中国の東北部、吉林省にある長春は、昔の満州国（こちらでは「偽満州国」と言っている）の首都、「新京」と呼ばれた町で、中国の日本語教育の中心の一つと言えるところです。長春にある東北師範大学の「赴日本国留学生予備学校」は、名前の通り、日本へ留学する学生のために日本語教育を行っている学校です。現在も、10月から博士号をとるために来日し、全国の主に国立大学の大学院国費研究生になる約100名の学生の日本語教育が行われています。東京外国語大学留学生日本語教育センターから毎年専任が1名、非常勤講師2名が派遣され、そのほかに日本学生支援機構からの3名の講師とともに、この学生たちの日本語教育に携わっています。8月には専門分野の日本語教育のために、東京工業大学を中心にした教師団が1ヶ月派遣されてきます。このプログラムは1979年に始まる日中共同の事業で、中国から日本に留学生を送る事業に、日本から文部科学省が日本語教育、専門教育の講師を派遣することで協力しています。現在は100名の留学生はすべて日本政府の国費留学生となっています。当初は学部に留学する学生を派遣していたものが、修士課程、博士課程と変わり、現在では、修士修了後の学生が送られています。東京外国語大学では79年から一貫してこのプログラムに協力しており、昨年このプログラムの30周年が祝われました。

長春は東北部に位置し、旭川と同緯度、冬はマイナス20度にもなる厳しい気候ですが、日本からの派遣は現在では3月末から8月までと、厳寒期は避けた派遣になっています。しかし、今年は50年に一度の厳しい冬ということで、教師団の到着した3月14日は大雪で、最高気温も零下という厳しい状況でした。4月に入っても降雪は続き、東京の真冬といってもいい気候でしたが、4月末になり、やっと少し春らしくなってきました。5月のメーデーを過ぎると短い春となり、一斉に花が咲き、その後は夏となるということです。短い春を惜しんで、「長春」と名付けられたと言うことです。

今年10月に日本に国費留学生として来日する約100名の学生は昨年の10月にここ長春の予備学校に集められ、「あいうえお」から日本語の学習を始めました。2月の春節（旧正月）の休みを挟む3月までの半年間は、中国人の先生によって授業が行われ、3月末から日本人教師と合同で授業が行われます。予備学校では日本式の直接法で授業が行われ、元々読み書きには強い中国人学生に対し、話す、聞くの訓練にも力が入れられ、日本への留学に備えています。中国、特に東北部では日本語教育が盛んで、教材なども整備されているようです。教室の設備は日本より進んでいるとも言える状況で、各教室に大きなスクリーンが備えられ、教卓のコンピュータの画像を映し出すことができます。中国人の先生方はパワーポイントで作った教材を駆使して、教育を行っています。

長春は都市部だけでも200万人、周辺をあわせると600万人の人口を持つ大都市で、古くから映画の製作所、自動車工場のあることで知られた町です。トヨタと合弁も行っている第一汽車（「汽車」は中国語で自動車の意味）はドイツのフォルクスワーゲンとも合弁を行っており、中国でも最大級の自動車会社として知られています。市内には中国製のトヨタ、ホンダといった日本車のほか、ドイツ車もたくさん走っており、毎日300台ずつ自動車が増えていると言われています。渋滞もひどくなり、通勤の時間がかかるようになっています。

長春には東北師範大学のほかにも吉林大学、長春大学などの大学もたくさんあります。市内の中心部にある大学の多くが、郊外の浄月地区に新しいキャンパスを建設し、予備学校もこの新キャンパスに2001年に引っ越してきました。新しいキャンパスができて、定員も増え、このキャンパスには約1万人の学生がいるそうで、学内の寮で生活しています。近くには教職員のための住居もたくさんできています。中心部にある本部には外国語学部などにやはり約1万人の学生がいて、全国から学生が集まっています。（坂本　惠）

China is overflowing with excitement ahead of the World Expo that will be held in May. As a nation with one of the world's fastest-growing economies, the cities are packed with people and goods, and one can feel the vigor of the society. Changchun, a city located in Jilin Province of Northeast China, was once the capital of Manchukuo and is now one of the centers of Japanese education in China. The "Japan Study-Abroad Prep School" at Northeast Normal University in Changchun prepares prospective study-abroad students in Japanese language education. Currently, about 100 students are studying Japanese in the program. They are expected to begin their doctorate programs in October as government-sponsored, international research students at various national universities all over Japan. Every year, one full-time and two part-time instructors from the Japanese Language Center, Tokyo University of Foreign Studies, as well as three other instructors from Japan Student Services Organization are dispatched to this Japanese education program. In August, a group of instructors, mainly from Tokyo Institute of Technology will be dispatched here for one month in order to strengthen Japanese language education in specialized fields. This program originally started in 1979 as a part of the Japan-China project, in which the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology provides Japanese language education and professional instructors for prospective Chinese study-abroad students. The Japanese government is sponsoring all 100 Chinese students who are currently studying in Japan through this program. The program initially accepted undergraduate students only, but has now expanded to graduate, doctoral, and postdoctoral students. Tokyo University of Foreign Studies has contributed to this program ever since its establishment in 1979, and celebrated the 30th anniversary last year.

Located in the northeastern part of China and on the same latitude as Asahikawa in Hokkaido, Japan, Changchun experiences temperatures as low as -20 degrees C in the winter. This program was designed to begin in late March and run through August in order to avoid the harsh winter season. However, as the area suffered the coldest winter in the last five decades this year, the Japanese instructors were welcomed by heavy snow and freezing temperatures when they arrived in Changchun on March 14. It continued to snow even in April, with the weather resembling winter in Tokyo, but signs of spring finally began to appear by the end of the month. Flowers started to bloom one after another in May, and after a short spring, the summer rolled around. It is said that "Changchun," written as "long spring", was named after the people's lament.

The approximately 100 prospective study-abroad students who will come to Japan this October have started their Japanese language studies by learning "a, i, u, e, o" at the prep school last October. They had lessons by Chinese teachers during the first 6 months until March, with a Chinese New Year break in February in-between, and since late-March, have been taught by both Chinese and Japanese instructors. The instructors employ the direct technique at the prep school, emphasizing listening and speaking among these Chinese students, who are generally strong in reading and writing. Since China is a country with the biggest population of Japanese language learners and has a long history of Japanese language education, various educational materials are readily available and accessible, especially in the northeastern region where Japanese education is well-developed. In addition, their classroom facilities can be said to be better than those in Japan, with each classroom equipped with huge screens for displaying PowerPoint presentations that the instructors use for their lessons.

Changchun is a large city with a population of 2 million just within its central area, and 6 million if all the surrounding areas are combined. It is known as the base for a number of film production studios and auto manufacturing plants. Among them is China First Auto Works, which has a joint venture with Toyota and is also known as the biggest car manufacturer in China. It is also easy to spot made-in-China Japanese cars like Toyota and Honda, as well as many German cars, in the city of Changchun. It is said that 300 additional cars take to the roads in the city every day, contributing to the horrible traffic and long commutes.

Aside from Northeast Normal University, there are other colleges such as Jilin University and Changchun University in Changchun. Many of these universities, located in the central part of the city, have built new campuses in the nearby suburb of Jingyue, and the prep school also moved to a new building in this area in 2001. The new campus has allowed for a larger number of enrollments, with approximately 10,000 students and also provides boarding for them , while more faculty housing has been built around the campus. There are another 10,000 students studying at the college of foreign languages on the main campus, attracting an increasing number of students from all over the country.

(Megumi Sakamoto)

【東北師範大浄月校の入り口】

ウクライナから見た日本　Japan as seen Ukraine

海外の様々な国や地域における日本、日本語や日本人に対するイメージについて留学経験者や外大の留学生に話していただくコーナーです。第２回は、ウクライナからの留学生、博士後期課程（大学院総合国際学研究科言語文化専攻）のコベルニック・ナディヤ（Коберник Надія）さんにお話を伺いました。

【コベルニック・ナディアさん】

K. N－日本には、大学4年生の時に日本語履修生として関西の国際交流基金に1カ月半ほど滞在し、その次が東京学芸大学の日研生、今回は3回目で、2006年４月から国費研究生、修士課程を経て現在に至っています。

Q－本学に留学した理由を教えてください。

K. N－もともと四字熟語に興味があり、日本語を勉強するウクライナ母語話者向けの四字熟語の教科書を作りたいと思っていて、中国語に由来する言葉が多いから、両言語に精通している先生を探していました。それがきっかけで望月圭子先生（主任指導教官）に出会うご縁がありました。

Q－以前、ウクライナの大学で日本語を教えていたそうですが、どうして日本や日本語に興味を持つようになったのですか？

K. N－子供の頃、家に日本製のきれいな陶器のお皿があったのを覚えています。白地にブルーの大きな花が描いてあって、私にとって最初の日本との出会いはこのお皿です。その後、小６と中１の時にアートの先生が書道など日本文化を紹介してくれました。

その縁もあって高校１年目から日本語を勉強し始め、大学では日本語を専攻しました。

Q－ウクライナの人は日本に対してどのようなイメージを持っているのでしょうか？

K. N－先進国、車や電化製品の質が良い、漢字の国、侍がいた国、古い建物が多い……それから、若者の間は最近日本のアニメと漫画が人気ですね。実はここ10年近く、特に日本との文化交流が盛んです。在留邦人は200人程度ですが、93年に日本大使館が開設され、2005年のユーシチェンコ元大統領の訪日以降は、「ウクライナにおける日本月間」がよく開かれ、映画の「リング」やアニメの上映もあり、日本文化は10代から40代の幅広い層で受け入れられています。キエフ工科大学の図書館内のウクライナ・日本センター（2006年 JICA により設立）では、日本語以外に書道、茶道、囲碁なども教えています。それからウクライナでは、6、7年前から和食が好まれ、日本料理店が年々増えています。また、日本文学にも関心が高く、I. ジューブ氏、I. ドゥビンスキー氏、M. フェドリーシン氏、I. ボンダレンコ氏などの翻訳者のおかげで、芥川龍之介、川端康成、安部公房、星新一や村上春樹などの小説、そして詩（『古今和歌集』など）がウクライナ語に翻訳されています。今一番人気があるのは村上春樹とか三島由紀夫ですね。

Q－日本へ来てからも日本への印象は変わりませんか？

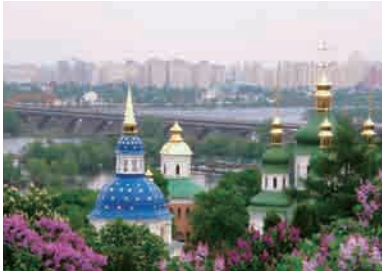
K. N－だいたいそうですね。初めて日本に着た時に、山道でも綺麗なアスファルト道路があるのに驚きました。さすが先進国だと思いました。そして、森の中に鹿や熊がいっぱいいるということは、日本では自然が大切に守られているんだなあと思いました。それに治安も良いですね。慣れないことと言えば、東京では建物がぎっしりと建てられているところが多く、とても圧迫感を感じます。そして風呂やシャワーが付いていないアパートの存在、それから洗濯機置き場が部屋の外に設置されているアパートにもびっくりしました。また、ウクライナでは電車かバスを降りる時、前に立っている人に「次の駅で降りますか？」と聞いて通路を空けてもらう習慣がありますが、日本では混んでいる電車やバスから人が降りる時に何も言わない場合が多く、人の踵を踏んでも謝らずに立ち去る人が多いのが残念です。

Q－卒業後の計画は？

K. N－国家の審査委員会に論文を提出しなければなりません。帰国してからもまだまだ論文執筆の生活は続きます。

Q－ありがとうございました。　（インタビュアー：谷口龍子）

The purpose of this column is to have those with overseas study experience, as well as international students at Tokyo University of Foreign Studies, discuss the images of Japan, the Japanese language, and the Japanese people held in various parts of the world. This time we have Ms. Nadia Kobernik (Коберник Надія) , an international student from Ukraine studying at the Language and Culture Studies in the Doctoral Program in the Graduate School of Global Studies at Tokyo University of Foreign Studies.



【ヴィドビツキー（Vydubyts' kyi）修道院】

Kobernik: I came to Japan for the first time during my senior year in college to learn Japanese, and stayed for one and a half months in the Japan Foundation in the Kansai area. My second time in Japan was as a Japanese Studies student at Tokyo Gakugei University. For my third time, I initially came as a government-funded foreign student in April of 2006, and after completing my masters program I have been studying in the doctoral program now.

Q: What were your reasons for choosing our university?

Kobernik: I was initially very interested in “yoji-jukugo” (four-character idioms in Japanese) and came up with an idea of creating a textbook on yoji-jukugo for Ukrainians learning Japanese. I was looking for a professor who had a wealth of knowledge in both Japanese and in Chinese, after finding out that many of the Japanese idioms originally came from Chinese idioms. That is how I came to know Professor Keiko Mochizuki (supervising instructor) .

Q: You told us that you had taught Japanese when you were in Ukraine. What made you become interested in Japan and the Japanese language initially?

Kobernik: I remember my first encounter with Japan was when I first saw a Japanese ceramic plate that my family used to have when I was little. It had a white base with a large, blue flower pattern on it. Later on, I learned about Japanese calligraphy and other Japanese traditions in my 6th and 7th grade art classes. That got me interested to learn more, so I started studying the Japanese language from my freshman year in high school. I also majored in Japanese in college.

Q: What do you think are some of the typical impressions that many Ukrainians have about Japan?

Kobernik: That Japan is a very advanced country, with high quality automobiles and electronic appliances. Chinese characters, a country where samurais once lived, many old buildings, etc.

Japanese anime and cartoons are very popular among the young people nowadays as well.

We have been having a very active cultural exchange between Japan and Ukraine especially in the last 10 years. We have currently about 200 Japanese residents, and the Japanese Embassy was built in 1993. Ever since former president Yushchenko visited Japan in 2005, “Japan Month in Ukraine” events have been held often. The Japanese movie, “The Ring,” and other Japanese anime were also screened in Ukraine. Japanese culture is well accepted especially among teenagers to people in their 40’s. At the Ukraine/Japan Center (established in 2006 by JICA) inside the library of Kiev Polytechnic Institute, there are not only Japanese language classes but also other classes teaching Japanese calligraphy, tea ceremony, and “igo” (game of go.) In addition, Japanese food has become very famous in the last 6 to 7 years, and the number of Japanese restaurants in Ukraine is increasing every year.

There is also a growing interest in Japanese literature. Thanks to Mr. Dzyub, Mr. Dubinsky, Mr. Fudorishin, and Mr. Bondarenko, we have been able to read translated versions of novels by Ryunosuke Akutagawa, Yasunari Kawabata, Kobo Abe, Shinichi Hoshi, and Haruki Murakami, and also poems (such as Kokin-Wakashu) in Ukrainian Haruki Murakami and Yukio Mishima are the most popular novelists right now.

Q: Has any of your images of Japan changed ever since you came here?

Kobernik: Mostly not. When I first came to Japan, I was impressed by the fact that there are roads paved with asphalt even on the mountain trails. This can probably only be seen in advanced countries. I also felt that people are making effort to preserve the nature when I saw deer and bears in the woods. It is also safe to live in most places.

The one thing I still cannot get used to might be that I feel the pressure from surrounding buildings especially when they are all built close together in Tokyo. I was also surprised to see apartments without baths or showers, and washing machines placed outside of apartment units.

When taking the train or the bus in Ukraine, people would usually ask other people standing in front of them if they need to get off at the next stop, in order to make room for those getting off. But in Japan, even when the train or the bus is packed with people, many of them try to push others to get off without saying anything. It is also unfortunate to see some people who don't even apologize after stepping on someone else’s foot.

Q: What are your plans after graduating from the doctoral program?

Kobernik: I will need to submit a thesis in Ukraine in order to pass the Ukrainian national exam. So I expect that I will be spending more time writing theses even after returning to my country.

Q: Thank you very much.　(Interviewer: Ryuko Taniguchi)

交流協定校紹介②　ウィーン大学東アジア研究所

Introduction to Exchange Agreement partner Institutions (2) -The Department of East Asian Studies at the University of Vienna

ウィーン大学東アジア研究所は、2000年にかつての日本・中国研究所と統合されて設置された。オーストリアの日本研究は1930年にさかのぼるが、現在のような、確かな言語能力と現代日本に対する社会科学的アプローチを基礎とした、日本について研究・教育の方向性が定まったのは1965年。東アジア研究所は、独立セクションとしてコリア研究の独立したセクションも備えているが、この研究所への統合によって、日本学に対する関心は恒常的に増えている。現在、約1500人以上の学生が、この研究所が提供している何らかの授業を履修しているし、そのうち、日本研究の授業を受講している学生は700人である。

約80人の学生が大学院およびポストドクター向けの日本研究の授業を取っている。この10年のあいだ、学生数が増えている一方で、残念ながら教員の数には変わりがない。現在、常勤のスタッフとしては、4人の教授・准教授および2人の日本語教員が働いている。社会学、社会人類学、映画研究・メディア研究、ジェンダー研究、そして2人の日本語教師である。そのため、授業の多くは、15人から20人の非常勤講師が担当している。

ウィーン大学は日本の10の大学と協定を結んでいる。日本研究の学生たちはこれらの協定関係から多大な恩恵を受けており、これらの学生のうち毎年おおよそ20人が協定にもとづく交換留学の機会を与えられている。東京外国語大学との学術交流協定が締結されたのは2004年であり、1年以内の留学期間で、相互に交換留学生を派遣している。この間、東京外語大の学生のドイツ語能力の高さにはいつも感心させられる。それは私たちの学生にとってよい模範であり刺戟となっている。

（ヴォルフラム・マンツェンライター、ウィーン大学東アジア研究所）

The Department of East Asian Studies at the University of Vienna has been founded in 2000, joining the formerly independent Institutes of Japan Studies and China Studies. While the history of Japan Studies in Austria dates back to the 1930 years, the foundations of the current strand of research and education about Japan, based on solid language competence and social scientific approaches to contemporary Japan, have been laid in 1965. Since the integration into the Department, which also features an autonomous section on Korea Studies, common interest in Japan Studies has constantly increased. Slightly more than 1,500 students are currently enrolled in any of the subjects offered at the Department, and the largest share has opted for the undergraduate program in Japan Studies (700) . About 80 students are taking classes in graduate and post-graduate courses of Japan Studies. While the number of students has been constantly rising over the past decade, the number of faculty member unfortunately has stagnated. Permanent positions are currently held by four professors (sociology, social anthropology, film and media studies, gender studies) and two language teachers. The majority of courses are therefore run by up to 15 or 20 temporarily employed teachers and lecturers.

The University of Vienna is currently holding partnership arrangements with ten universities in Japan. Students of Japan Studies benefit mostly from the associated exchange programs bringing up to 20 of them to Japan annually. The partnership with Tokyo University of Foreign Languages has been started in 2004, allowing two students from each side visiting the partner university for a period of up to one academic year. Over the years, we have been impressed by the usually excellent German language capabilities of the TUFS students who therefore are estimated highly as valuable role-model and inspiration for our own students.

(Wolfram Manzenreiter)

2010年活動報告　1月～5月

Activity Reports

■シンポジウム・講演会等■

●3月6日～7日　国際シンポジウム「世界の日本語・日本学～教育・研究の現状と課題～」

●4月5日　国際日本語教育部門主催ワークショップ「アメリカにおける日本語教育ー英語母語話者に対する効果的な日本語教授法ー」ロバート・ラッセル（ブリンガム・ヤング大学）

●5月20日　比較日本文化部門・国際連携推進部門　共催講演会「明治維新と宗教：北畠道龍の生涯を通して」ブリッジ・タンカ（デリー大学）

■海外大学・研究機関調査■

●3月15日～23日　アメリカ合衆国・メキシコ（UCLA・全米日系人博物館・エル・コレヒオ・デ・メヒコ日本研究センター）友常勉

●3月15日～24日　フランス（デイデロ第7大学・スタンダール第3大学・フランス国立東洋言語文化学院・プロバンス大学・パリ日本文化会館）谷口龍子

●3月18日～29日　ドイツ（ハンブルグ大学・フンボルト大学・ベルリン自由大学）谷和明

●3月20日～29日　スペイン（セビリア大学・マドリード自治大学）高垣敏博

●3月21日～26日　中国（北京大学外国語学院、北京外国語大学・北京日本学研究センター）望月圭子

●3月24日～31日　カナダ、アメリカ合衆国（Centre for Canadian Language Benchmarks・ACTFL 全米外国語教育協議会）伊東祐郎

●5月16日～24日　アメリカ合衆国（ハーバード大学）望月圭子

☆上海外国語大学（河路由佳）、パリ第三大学、国立政治学院（藤森弘子：教育 GP「世界的基準となる日本語スタンダーズの構築」）の調査報告を御提供いただきました。

■文化庁委託事業■

「生活者としての外国人」の日本語能力の測定・評価に関する調査研究

■会議歴■

●センター会議：2010 年1 月8 日、2月4日、4月16日、5月13日

●部門会議：2010 年1月19日、2月2日、3月11日、29日、30日、4月23日、27日、28日、5月24日

●ジャーナル会議：5月26日

■ Symposiums and Lectures ■

● March 6 and 7, 2010: International Symposium-“Globalizing Japanese Studies: Current Issues in Education and Research”

● April 5, 2010: Workshop-“Japanese Language Education in the U.S.A.: Teaching Japanese as a Foreign Language to Native Speakers of English”

Lecturer: Professor Robert Russell, Associate Professor of Japanese, Brigham Young University

● May 20, 2010: Lecture - “Meiji reform and religion: Life of Kitabatake Doryu”

Lecturer: Professor Brij Mohan Tankha, University of Delhi

■ Firsthand Examination of Overseas Universities and Research Institutions ■

●15-23 March 2010: U.S.A., Mexico (UCLA, The Japanese American National Museum, Foro Cultural México - Japón; El Colegio de México) Tsutomu Tomotsune, International Cooperation Division

●15-24 March 2010: France (Université Paris Diderot-Paris 7, Université Stendhal - Grenoble 3, Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Université de Provence, Maison de la culture du Japon à Paris) Ryuko Taniguchi, International Japanese Education Division

●18-29 March 2010: Germany (University of Hamburg, Humboldt University of Berlin, The Free University of Berlin) Kazuaki Tani, Comparative Japanese Culture Division

●20-29 March 2010: Spain (Universidad de Sevilla, Universidad Autónoma Madrid) Toshihiro Takagaki, Contrastive Japanese Division

●21-26 March 2010: China (Foreign Language Institute of Peking University, Beijing Research Center for Japanese Studies; Beijing Foreign Studies University) Keiko Mochizuki, International Japanese Education Division

●24-30 March 2010: Canada, U.S.A. (Centre for Canadian Language Benchmarks, American Council on the Teaching of Foreign Languages; ACTFL) Sukero Ito

●16-24 May 2010: U.S.A. (Harvard University) Keiko Mochizuki, International Japanese Education Division

☆ examination reports of Shanghai International Studies University (Yuka Kawaji) , Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3, Institut d'Etudes Politiques de Paris (Hiroko Fujimori: GP “The Development of Global Japanese Standards”) received.

■ Project commissioned by the Agency for Cultural Affairs ■

“Research Study on Measuring and Evaluating Proficiency in Everyday Japanese Communication”

■ Meetings ■

● Center meetings: 2010–8 January, 4 February, 16 April, 13 May

● Division meetings: 2010-19 January, 2 February, 11; 29 and 30 March, 23; 27 and 28 April, 24 May

● Journal meetings: 26 May

国際日本研究センター・ジャーナル『国際日本研究』(仮)の発行と投稿論文募集のお知らせ

Call for papers and the information on the Journal of the International Center for Japanese Studies, International Japanese Studies

『国際日本研究』(仮)要項　Editorial Policy and Guidelines of International Japanese Studies

発行の目的：国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期：年1回、1月（2010年度より開始）

編集規程：

・国際日本研究センターは『国際日本研究』（仮）の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。

・投稿論文について　『国際日本研究』（仮）は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。（本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと）

・査読　投稿された研究論文については、編集委員会の責任において査読者を選定し、査読審査をおこなう。

　査読は、委員会が依頼した2名の査読者が査読要領にもとづき審査し、採否の決定をする。その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。

・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。

・その他、編集上の細則については編集委員会が適宜これを定める。

送付先：国内…大学の図書館・付属機関、主要公的機関
　　国外…交流協定校、日本研究部門を擁する主要大学の図書館

応募規程：

・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文（20ページ程度、400字×60枚）、海外の研究動向・研究潮流の紹介（20ページ程度）、研究ノート（10ページ程度）、書評（1ページ）

・原稿の書式　寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には英語の概要(300語程度)、英語論文には日本語の概要(800字程度)をつける。

・投稿エントリーとエントリー締め切り：論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、下記編集委員会アドレスにEメールで投稿予定の旨を連絡すること。メール本文 には、氏名・論文の題名（仮題でもよい）・所属機関名（該当者のみ）、および連絡先（住所・電話番号・メールアドレス）を明記すること。また、メールの Subject（件名）には「『国際日本研究』（仮）投稿希望」と記入すること。

公開、複製、公衆送信に関する権利：掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

Purpose :
To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency : Starting from the fiscal year of 2010, published annually.

Editorial Policies :

・**Editorial Committee:**For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from five divisions of the Center.

・**Articles:**The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)

・**Reference:**Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.)

The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center's research activities.

The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Circulation

Domestic Locations:
University libraries / affiliated organizations, major public institutions in Japan

International Locations:
Designated exchange universities, major university libraries with divisions of Japan studies in other countries

Submission Requirements:

Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 20 pages,) international research trends (approx. 20 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (1 page.)

Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

Policy Acknowledgement : All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

【指定期日】投稿希望連絡締め切り　2010年7月15日必着
　　投稿論文締め切り　2010年9月15日必着

【連絡先】東京外国語大学　国際日本研究センター
『国際日本研究』(仮) 編集委員会
〒183-8534　東京都府中市朝日町3-11-1
電話 / FAX：042-330-5794
E-mail：info-icjs@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

【Deadlines】 Deadline for Jounal entry is July 15th, 2010
　　Deadline for Submission is September 15th, 2010

【 For further information, please contact 】
International Japan Studies Editorial Committee, International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies
【Address】 3-11-1, Asahi-cho　Fuchu-shi, Tokyo　183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81（0）42-330-5794
E-mail : info-icjs@tufs.ac.jp　　URL: http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

研究会のお知らせ　The Study Meeting

対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』　第二回研究会

2010年7月3日（土）15:15～18:00
場所：東京外国語大学 研究講義棟4階419号室
シリーズ「外国語と日本語との対照言語学的研究」で2回目の研究会を開催します。今回は、益岡隆志氏（神戸市外国語大学）、成田節氏(本学)、岡野賢二氏(本学)の研究発表を予定しています。

The 2nd study meeting hosted by the Contrastive Japanese Division

15:15~ Saturday, 3 July 2010
Room 419, Research and Lecture Building, TUFS
The second series of regular study meetings "Contrastive Study of Japanese and Other Languages" will be held at Tokyo University of Foreign Studies (TUFS, Fuchu Campus) with lecturers: Takashi Masuoka (Kobe City University of Foreign Studies), Takashi Narita (TUFS) and Kenji Okano (TUFS).

第1回　若手研究者ワークショップ・
台湾農民運動 - 嘉南大圳灌漑システムへの反対運動を事例に

2010年7月17日（土）14：00～
場所：東京外国語大学本部事務棟・中会議室
報告者：清水美里氏（本学大学院博士後期課程）
司会：野本京子（本学大学院教授）
コメンテーター：松本武祝（東京大学大学院教授）

1st Young Scholars Workshop

14:00~ Saturday, 17 July 2010
Medium Conference Room, Administration offices, TUFS
"An Agrarian Movement in Colonial Taiwan: by focusing on the protest against the irrigation system at Jia-nan-da-zhen",
Speaker：Misato Shimizu (Ph.D., Candidate, TUFS)
Chair: Kyoko Nomoto (Professor, TUFS)
Commentator: Takenori Matsumoto (Professor, Tokyo University)

発行　東京外国語大学国際日本研究センター
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F
TEL 042-330-5794　E-mail info-icjs@tufs.ac.jp　URL http://www.tufs.ac.jp/common/icjs